



BLT カフェの店内

BLTカフェ (株式会社フレッシュ)

〒960-8253 福島県福島市泉道下 19-7
 TEL : 024-563-5018
 営業時間 11:00 ~ 17:00 (コロナ対応でテイクアウトを推奨させていただいています)
 定休日 (月/火) 予約の場合・要相談
 E-mail : bltcafe.fukushima@gmail.com HP : https://www.blt.land
 Facebook : https://www.facebook.com/bltland/

「障がいのある人と自分は同じ人間なんだ」と実感した出来事

吉成さんが障がいの者の雇用を現実的に考え始めたのは、震災直後のある出来事がきっかけでした。福島市内で営む店「イカぼっぼ海賊団」をイベント向けに出店していたある夜、高校生ぐらいの女性2人が助けを求めて駆け込んできました。「さっき、私たち、盗撮されたみたいですよ」

話を聞くと、盗撮した疑いのある人は、車いすの障がい者だ、と。吉成さんは、その車いすの人から話を聞いた上で、男

性が持っていたビデオカメラを預かり、駆け付けた警察官に渡しました。その時、「彼がやったことは犯罪で、被害者の女性たちの心に傷を負わせた」とショックを受けました。それと同時に、「障がいの者にも異性に興味がある点では、健康者と変わらない部分がある。同じ人間なんだ」と実感したという。犯罪をするか、しないか、その違いは何だろう。障がいの者の方も仕事があったら、お給料が得られて、将来は結婚したり、子どもを持ったりする。障がいの者が当たり前前に仕事を持つ社会を実現すれば、夢がもっと広がるのではないかと。そんな思いが頭に浮かびました。

ちょうどその頃、吉成さんは、福島駅周辺の中心街にあるパセオ470通りに「Café Dining agato (カフェダイニング アガト)」というバー・飲食店をオープンさせました。店名は、震災で感じた人々の助け合いに感謝を込めて「ありがとう」という言葉にちなみました。その店に、いつの頃からか、障がいのある女性、菅野真紀さんが訪れるようになっていました。菅野さんは、全身の筋肉やじん帯が徐々に固く骨のようになってしまいう「進行性骨化性繊維異形成症状 (FOP)」という、全国に患者が60人から80人ぐらいしかいない難病。介助者の人と一緒に飲みに来て、本音の話をしていく菅野さん。お店の常連客からも「かんちゃん、かんちゃん」と慕われるようになりました。障がいがあるということ、生きること、死に対する考え方。震災の後だけに、菅野さんの言葉は、吉成さんの心に染みしました。「障がいのある人もない人も、変わらないんだ」。改めてそう実感しました。



人目を引くキッチンカーは人気

その後、吉成さんは、福島市内でも障がい者雇用の草分け、スポーツウェアなどの縫製アパレル「クラロン」を視察しました。同社が、多くの障がい者を雇用し、地域の人たちからも尊敬されていることに衝撃を受けました。「障がい者が主役になる会社、社会は、震災の後の福島が目指すべき姿なのではないか？」そう考えた吉成さんは、自分の会社でも採用することを真剣に考え始めました。

まず初めに、株式会社フレッシュの理美容部門で雇用することを考えました。しかし、国家資格を持っていないとお客さんに触れることができないのが理美容業。そうすると、免許を持たない障がい者の場合、店内の清掃など周辺の作業が中心になってしまいます。彼らの存在も仕事も「脇役」にしかならないのでは、障がいのある人、ない人が一緒に働くという理想の形は実現できません。では一体どうしたらいいのでしょうか。考え抜いた挙句、一つのアイデアが浮かびました。吉成さんは早速、それを実行に移します。



福島市北部の泉地区に、地元で根差した活動を続けるハンバーガーショップ「BLTカフェ」があります。米国に滞在した経験がある故・吉成洋拍さん(5月中旬に大動脈解離で急逝)が、地域の人々が「恩送り」でつながる拠点にしたいと、障がい者雇用や子ども食堂事業とともに始めたユニークなお店です。

BLTカフェに込めた吉成洋拍さんの思い

障がいのある人と一緒に働く場を増やす―まずはピザ店から

吉成さんが考えた、障がい者と共に働くお店―それは一風変わったピザ店でした。

障がい者の店員がピザの生地をお客さんに渡し、お客さん自身が具をトッピング。それを焼いて提供する―というお店です。障がいのある人はピザ生地を作ってお客さんに渡す係で、いろいろな人とのコミュニケーションの場も共有できます。



BLTカフェの厨房

現在、BLTカフェ店長の一條りかさんは、ピザ店の開店に尽力した一人です。

「障がいを持った人でもできる仕事は何か」ということでいろいろと工夫して、しかも面白いお店にしたい、という吉成さんの思いが詰まっています」と振り返ります。

店内には常時20種類以上の色とりどりの食材が並び、お客さんは楽しそうにトッピングして、自分だけのピザを作り、店員が焼き上げます。一人一人の顔が違いうように、個性も違い、障がいのある人、ない人、その多様性を象徴したかのようなピザの数々。

ところが、この店は実際には失敗に終わっていました。

セルフサービスでお願いすると、お客さんはピザ生地いっぱい、山盛り具をのせてしまいます。そうすると、焼く時に生地まで火が通らなくなり、水分がたくさん出た、おいしくないピザになることも。盛り付け具合によっても、真ん中が生焼けだったという失敗例もありました。

学生の頃から、父親が立ち上げた飲食店を手伝ってきたこともあり、「自分も料理人の端くれ。おいしい料理を届けたい」という吉成さんのプライドから、この企画は大幅に方針転換せざるを得なくなりました。

BLTカフェがオープン

その失敗の後も、「障がいを持つ人も一緒に、生き生きと働ける飲食店を実現したい」という吉成さんの思いは失われませんでした。今度は従業員がピザを作ってお客さんに提供するという形に変更。全体の作業の内容や流れをなるべく簡単にしたもの、当時2人いた障がいを持つ店員が、ピザを焼く作業をすることは現実的には難しくなりました。そして再び、障がいを持つ人が雑用をしがちになっていきました。これでは同じことの繰り返しになってしまいます。それでは、どうしたらいいのでしょうか。このままでは、店も経営が成り立たなくなってしまうです。

そこで、吉成さんが次に発案したのが、「ピザに具をのせる」パターンを転用して、「クロワッサンに具材を挟む」タイプのお店です。結局これが、現在の「BLTカフェ」の原型になりました。

「すでに焼いてあるクロワッサンに具を挟むだけだから、簡単にできるんじゃないか」。ピザの店を始めてから、スタッフの作業や動線などは、障がいを持った人が働きやすいかどうかという視点で貫徹していました。実際、店で働く人の障がいはいろいろでした。精神障がいや、



福島県観光物産館でも販売されたオーナーズバーガー

現在、お店で提供しているこのオーナーズバーガーの価格は800円から1000円台。客の8割から9割が、オーナーズバーガーを注文する看板メニューになりました。当初は価格を決める段階で、「800円から1000円台のハンバーガーが売れるのだろうか」と議論になりました。福島市内には、ハンバーガーの専門店はなく、マクドナルドやモスバーガーなどのチェーン店では、1つ平均で300円からセットで600円台。それを超えた価格帯で売れるのかという不安がありました。

ところが、吉成さんの頭の中には、アメリカで食べたハンバーガーのイメージが浮かんできました。「おいしければ、必ず売れる」。発売当初、売上の伸びはゆっくりだったものの、4か月から半年ぐらいたが過ぎるころになると、販売数はクロワッサンを追い抜いてダントツのトップに。しかも価格1個600円のハンバーガーよりも、800円のオーナーズバーガーの方が飛ぶように売れ始めました。

福島市泉にあるBLTカフェ。ポップな看板が楽しさを演出



学習障がいなど多様で、もちろん、性格も違う、個性もある、作業についても得意不得意がある。「不得意なことを無理にさせるんじゃないくて、得意なことを伸ばしてあげよう」という形で仕事を作られていきました。

売れ出した理由の一つに、ハンバーガーブームと、利用者による口コミの効果があると考えられています。猪苗代町に、「HERO'S DINER（ヒーローズダイナー）」という有名なハンバーガー専門の店があり、ツーリングで立ち寄る全国のバイク乗りの人たちが大人気でした。このお店は、利用客の口コミで静かに広がり、最初は地元の人たちから全国の人へと広がるブームを起こしていました。

このお店が話題になるなかで、BLTカフェにもハンバーガーファンが立ち寄るようになっていきました。鉄道の駅から遠いところにある住宅街の立地のため、利用客のほとんどが車での来店です。市内、県内だけでなく、最近では県外ナンバー、例えば世田谷などの東京、山梨などの首都圏、さらには大阪、滋賀など関西地方のナンバーの利用客も増えました。

「近くを通って、おいしいハンバーガー」でネット検索したら、ここがヒットしたので来ました」と言う人も。遠くまでおいしいハンバーガーを食べに行っていた人が、「福島市内でおいしいハンバーガーが食べられることが分かったので、また来ますね」とリピート利用してくれるようになりました。人々の口コミで、地域でのハンバーガーブームを生んでいます。



丁寧に焼き上げられるパテ

子ども食堂

BLTカフェでは、地域とのつながりを築こうと、2020年10月から登録制で、毎月1回、お弁当や食材などを提供する「BLT子ども食堂」という企画も実施しています。登録しているのは、市内の170世帯以上、400人から600人以上が毎回利用しています。この子ども食堂は、「家族団らん」がテーマ。一般的な子ども食堂の多くが、子どもだけに食事を提供していますが、「BLT子ども食堂」は、家族で一緒に食事が取れるように、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんなど家族全員にまで対象を広げ、一家庭で家族全員分、6食、8食を受け取れるようにもしています。季節に合わせて「恵方巻き」を配った時には、嬉しそうに持ち帰る子どもたちの姿が印象的でした。クリスマスの時には、「クリスマススケキが欲しい方はLINEにメッセージをください」と吉成さんが投稿し、2家庭にスケキをプレゼントしました。

「子どもは繊細で敏感。子ども食堂から子どもの分だけお弁当をもらってきたら、母親は『お母さんはいいいから、あなたが食べなさい』と言うでしょう。親が食べないのに、自分だけ食べたら、子ども

「ペイフォワード、お買い上げ、ありがとうございました！」

「ありがとうございます！」

一人の客が、このペイフォワードカードを購入すると、店内の従業員から自然に「ありがとうございます！」と声がかかります。誰かが決めて始めたことではなくて、自然に声を合わせるようになっていました。

この「ペイフォワード」のシステムをもう少し具体的に説明しましょう。お店に来た人は、見知らぬ誰かに利用してもらえるように、ハンバーガーなど店の飲食に使えるカードを購入します。購入したカードは、入り口のカードホルダーに掲示しておきます。次に来たお客さんで、無料で食事をしたい人は、そのカードを使って食事をすることが出来ます。

一條さんはこう話します。「吉成さんは、『誰かのためになれば』、という地域の人たちの役に立つお店にしたい、という思いがありました。同時に、多くの人に、このユニークな取り組みを知ってもらうことで、店の存在も伝えてもらったり、ひいては売上げにもつながればと考えて始めたと思います。でも実際初めて見たら、私たちスタッフの気持ちで、この『恩送り、ペイフォワード』でものごく変わっていったんですねという。「お店に来ていただいたお客様と、カ-



子ども食堂のお弁当メニューで大人気だった恵方巻

もはおいしく食べられないと思います。私が子どもの立場だったらどう感じるだろうかと想像してみたらそうですからね。そんな場面は、私自身が嫌だったんですね。子どもが気おくれするような雰囲気にならず、楽しい家族のどんらんが生まれる子ども食堂にしたいと思いました」と一條さんは語ります。

そして、「月に一度だけですが、そうやって家族全員と一緒に食事をする機会を持つてもらえたら。吉成オーナーとも話していたのですが、こうして顔見知りになることで、『今どうしているの』と声を掛けられる関係になり、その中で何人かがもしかして大変な状況になったとき、助けを求められる場所にこのカフェがなればいいと。『駆け込み寺』のように、いつでも来ていいという信頼と安心の場になれたらと思っています」



店内に掲示された無料カード。見知らぬ人のために、見知らぬ誰かが先にチケットを買ってくれた

ドを買ってくださったお客様の方、に『本当にありがとうございます』という感謝の気持ちがあふれてきました。世の中には、こんなに優しい人、こんなに思いやりにあふれている人がいるんだな」と、目の前で見せていただいて、感動させていただいているわけです。ま

子ども食堂から弁当を受け取るある家庭の母親からメッセージが届きました。「いつも忙しくて夕食の準備で子どもと遊ぶ時間がありませんでしたが、子ども食堂の日、子どもとお弁当を食べました。そして子どもと一緒に公園で遊びました。料理をしなくていいから、久しぶりにゆっくり遊んであげられました。本当にありがとうございます」そのメッセージを読んで、吉成さんや一條さん、スタッフも全員、「ああよかったね」と喜びを分かち合いました。「BLT子ども食堂」の活動が、子どもを持つ親たちに、お弁当と一緒に、ゆとりの時間を提供したのです。



吉成さんのしたいことリスト

ペイフォワードで「お互いさまの街ふくしま」へ

BLTカフェに入ると、入口の左側の壁にカードが掛けられています。よく読むと、来店した客が、これから来る見ず知らずの客のために、代わりに食事代を先払いした「恩送り・ペイフォワード」カードです（ペイフォワードは「先払い」の意味）。自分が受けた好意を見知らぬ人に先払いで贈るという映画「ペイフォワード 可能の王国」にちなんだネーミングです。

物品や食料品をシェアする「みんなの食糧庫」が つながる

BLTカフェの前には、スチール棚とプラスチックの衣装ケース、小さな冷蔵庫が置いてあります。これも「恩送り」の活動の一環で、「みんなの食糧庫」という取り組みです。自宅にある不用品や食料品、食材など、ほかの人に活用してもらいたいものをここに持ってきて、置いておきます。だれでも自由に持つことができるので、そして自由に持つていつて構いません。この企画も、「恩送り」から吉成さんの発想で始まりました。ここには、いろんな人が訪れます。アイスクリームを買って冷蔵庫に入れていく人。たまたま通りかかった子どもたちが、そのアイスクリームをうれしそうに持つていきました。使わないティッシュボックスや、食べないカップヌードルや缶詰を置いていく人もいます。生卵を販売しているある業者は、「新聞で見えて、協力したいと思ったから、来たよ」と、月に数回、規格外の卵を冷蔵庫内に置いて行ってくれます。このほかに、個人の市民から、缶詰、ご飯のレトルトとカレーのレトルトがパックになった一食セットが寄付されたこともあります。

子どものおもちゃ、ぬいぐるみ、ボックスティッシュ、除菌用アルコール、洗剤：いろいろなものが見知らぬ誰かから寄せられ、見知らぬ誰かに活用されています。

BLTカフェで始まったパイフワード、カード購入による「恩送り」の取り組みは、福島市内100店舗という目標で、対象は飲食店です。そのため、飲食店以外でもできる恩送りはないかと考えた末、「誰でも家にある不用品や食料品を持ち寄って、自由に持っていけるようにしたら、誰でもどこでもできるんじゃないか。家の前に机を置くだけでもいい」「ニューヨークに「みんなの冷蔵庫」という食料支援活動があることをネットニュースで見て、そこからヒントを得ました。そして始まったのが「みんなの食



みんなの食糧庫に置かれた野菜類

糧庫」でした。

この活動では、ある高齢の女性「はるちゃん」との出会いが生まれました。BLT子ども食堂を始めた2020年10月のこと。高齢の女性が店頭のチラシを見て、「私も利用してもいいのかい?」と店のスタッフに尋ねてきました。「もちろんです。子ども食堂となっていますが、昔子どもだった人も利用できますよ」とスタッフが答え、この女性の依頼で、スマートフォンでの登録手続きを手伝いました。その女性はニコリと笑顔を浮かべ、帰っていききました。この人が「はるちゃん」です。

はるちゃんは、それから、子ども食堂のたびに訪れました。吉成さんは、「はるちゃん、一緒に俺らと活動しようよ」と、見かけるたびに声を掛けました。でも、はるちゃんは、うん、とは言わず、それでもたびたびみんなの食糧庫に立ち寄っては、イチゴやキュウリなどを嬉しそうにもらっていました。

そんなある日。たまたま吉成さんが店に早く来ていた午前10時頃、はるちゃんが店に現れました。なんと、自分で作ったハウレンソウを手にとって、「私が作ったものだけど、こんなものでも良かったら」

その姿を見た吉成さんは、「はるちゃん、ありがとう!ありがとう!」と満面

の笑みではるちゃんを迎えました。

今までもらうばかりだったはるちゃんが、この日初めて、自家菜園のハウレンソウを持ってきてくれたのです。吉成さんは興奮しながら、「俺は、本当にこれがいりたかったんだ。この顔が見たかったんだ」と大喜び。その喜びは、店の従業員にも伝わり、店内は温かな雰囲気です。

その日、はるちゃんはなんと3回も店を訪れて、みんなの食糧庫の棚を見ていきました。「ハウレンソウはどうなったかなと思って」。ハウレンソウは大人気で、午後3時にはなくなっていました。それから1週間後。またまたはるちゃんが現れました。今度は、手に一杯の自家菜園で作ったネギを持って。今度も吉成さんが大感激したのは、言うまでもありません。「誰かのために、自分が動く。誰かのために、自分が働く。その喜び、幸せな感じを、はるちゃんも実感したんじゃないかな」。そんなふうに吉成さんはつぶやきました。

一条さんは当時を思い出して言います。「大人になると褒められることがめつきり減りますよね。でも褒められたら、大人でも子どもでもうれしいのは一緒に子ども食堂やみんなの食糧庫は、誰かのために自分ができることを重ねたり、誰かに何かをしてもらうことを通じて、『孤

吉成さん亡き後、その遺志を継いで

毎日毎日、地域の人のため、家庭の団らんを実現するために走り回っていた吉成さん。その突然の死に、一條さんや従業員、一緒に活動していた「チームふくしま」の仲間や地域の人たちに衝撃が走りました。告別式では、吉成さんの希望で、参列した人が、棺にたくさん感謝のメッセージを書きました。そして仲間たちは、吉成さんの棺を胸上げして、見送りました。

吉成さんやチームふくしまのメンバーが支援してきた福島市の児童養護施設でも、子どもたちや職員によってお別れの会が開かれました。ホワイトボードに吉成さんの似顔絵とたくさん感謝の言葉があふれました。

吉成さんは、児童養護施設の支援を始めた当初、「施設で過ごす子どもたちはかわいそうだ」と思っていたそうです。ところが、職員から「ここにいる子たちは幸せなんです。見つけられて、保護されて、今は危険な状態にはいないから」と説明を受け、大きな衝撃を受けました。そのような体験も、子ども食堂を通じた子どもへの支援を始める背景になっています。



ありし日の吉成さんの等身大写真パネルが今もお客さんを迎える店内

吉成さんはよく、「子どもたちには口

で説明するのではなくて、カッコいい大人の背中を見せたい。その背中に子どもたちが憧れて、同じようになりたいと思うはず」と一條さんらスタッフに話していたそうです。ボランティア活動も「してやってみる、というのではなく、自分たちが楽しみたい。自分が楽しみたいと周りも楽しめない。楽しんでやっている姿を子どもたちに見せてほしい」と語っていました。実際、その通りに、多くの活動を仲間や地域の人たちと一緒に、わ

ら実行してきたのが吉成さんでした。

子ども食堂やみんなの食糧庫、恩送りの活動は、地域の新たなつながりを築きました。これらの活動や理念と連動して、本業のBLTカフェの知名度も上がり、利用客も増えるという相乗効果が出て、さらに各事業や活動が活発になっていく『三万よし』の成果が生まれています。

これらは、吉成さんが蒔いた種。大切な遺志。それを受け継いだ仲間たちが、今日も福島で活動しています。その思いをさらに広げるために。

採用と教育研究所

saiyo to kyouiku kenkyujo

志ある中小企業経営者の応援団として「採用から共育」まで一貫した支援サービスを行っている。これまで数多くの社員、職員の採用・人財育成・職場定着等に携わり、CSR（社会貢献活動）を活用した「いい会社創り」のサポーターとして定評がある。



YELL

Vol. 22

2021年6月29日

発行：採用と教育研究所
〒960-8055
福島県福島市野田町 6-7-8
電話 024-529-5153
info@saiyoutokyoku.com



独じゃない。一人じゃない」と実感できる場だと思えます。そして何かが起きた時のための駆け込み寺にもなっていると思います」。

今も、はるちゃんは時々訪れています。ジャガイモを持っていく日もあれば、ゼリーを持ってきてくれる時もあります。犬の散歩で店の前を通りかかるだけのこと。そのたびに、店のスタッフは「はるちゃんがさつき通ったよ」と、声を掛け合っています。



日用品も提供され、誰でも自由に持っていくことができる